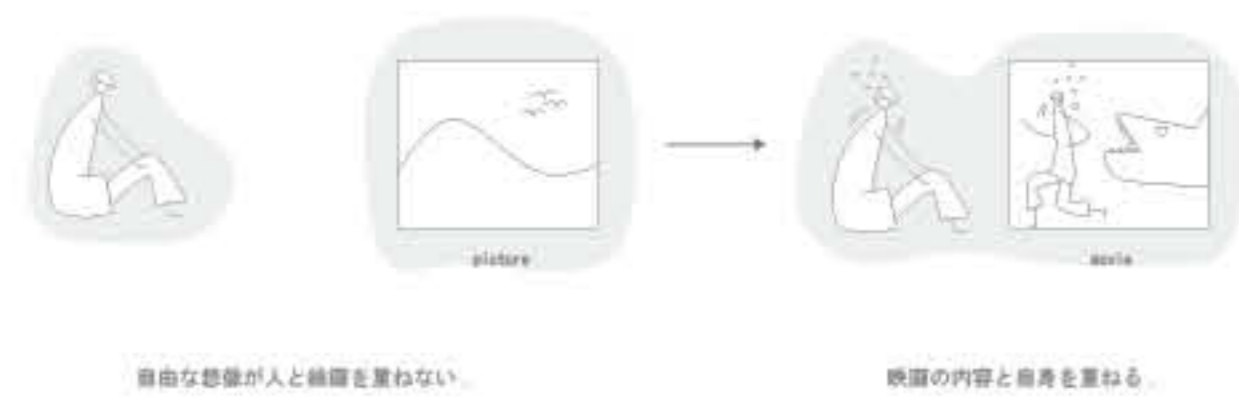




House to Touch

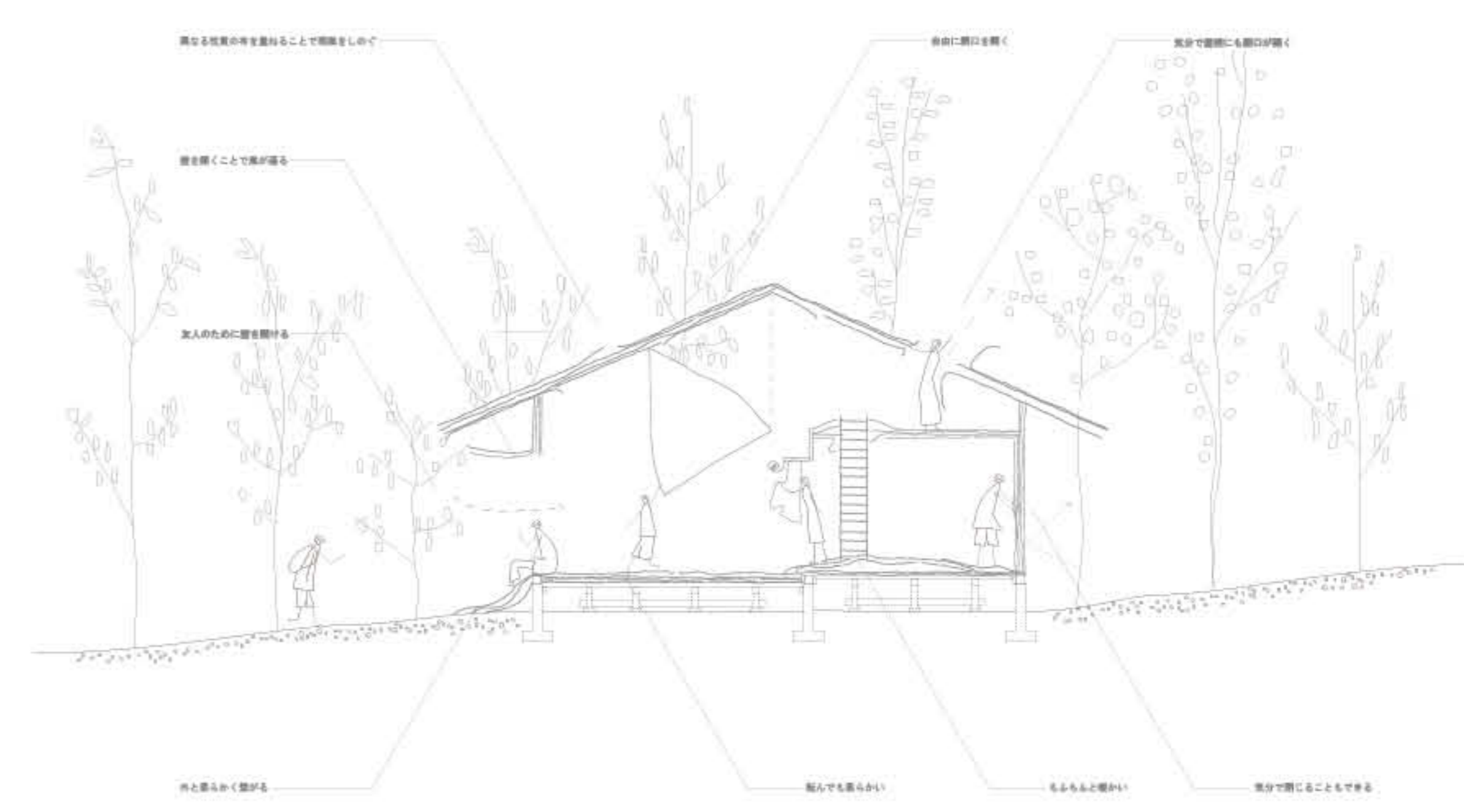
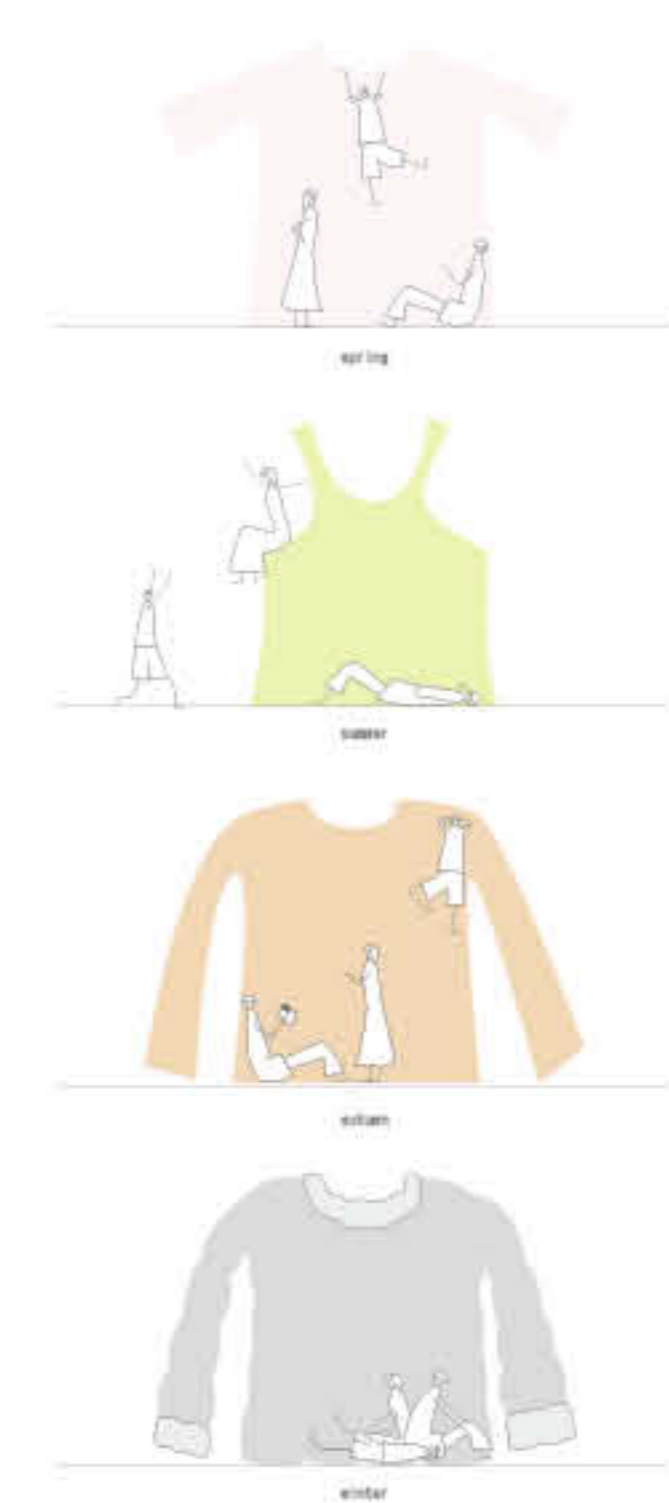
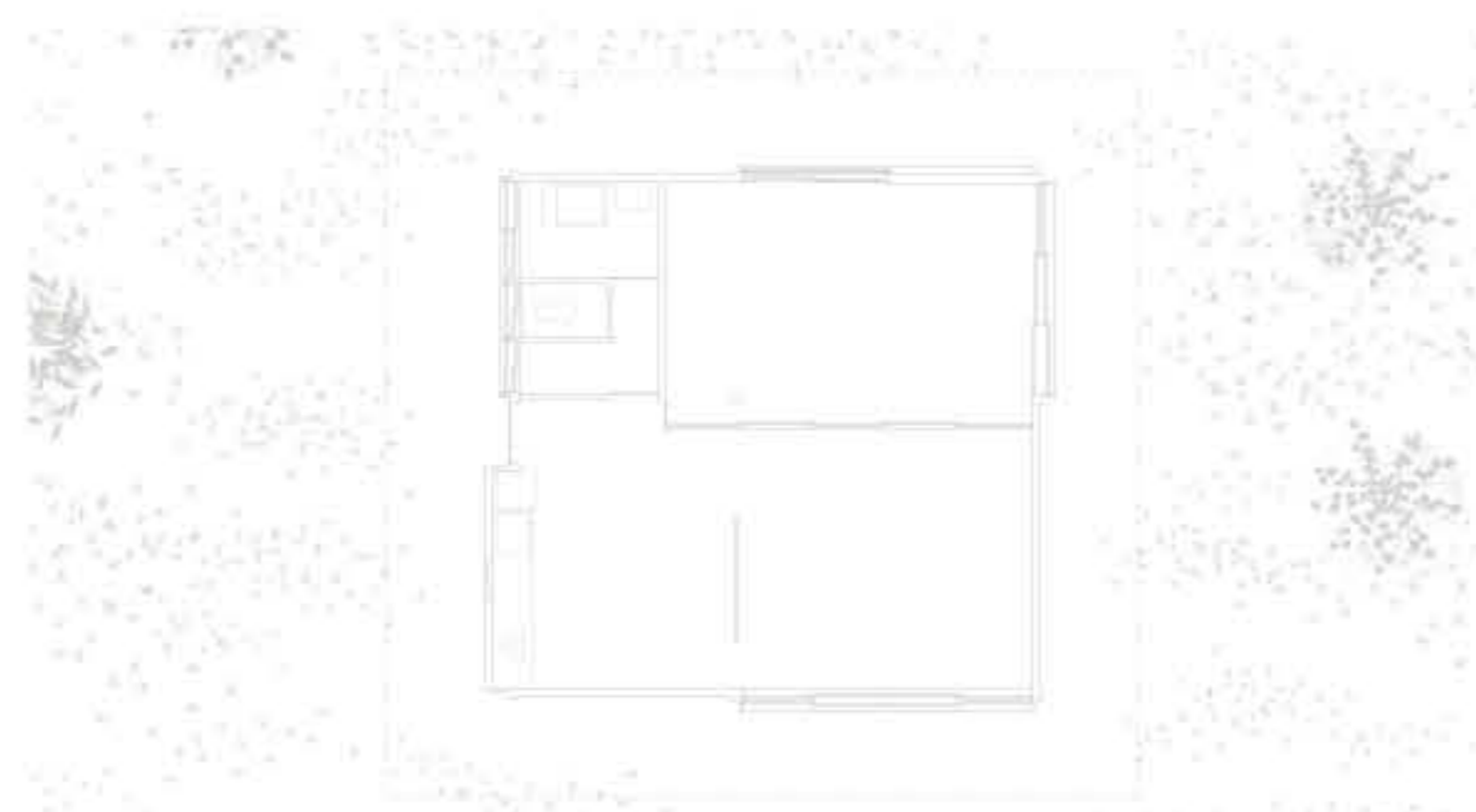
人は映画を、絵画のように集中して鑑賞するのではなく、くつろいだ状態で鑑賞する。その状態で無意識に知覚される映画は、映画の内容を自分自身に重ねやすい。それゆえ人は、映画の人物や状況などと自分の経験を重ね、時に物語の主人公となり、同じ様に怒り、悲しむ。人は、映画という対象と重ねることで、主体と対象という関係は消失する。

人と家との関係は絵画的である。そこには、人と家という明確な区別が存在している。映画の世紀を経験した私たちにとって、その対比は図画的なものである。

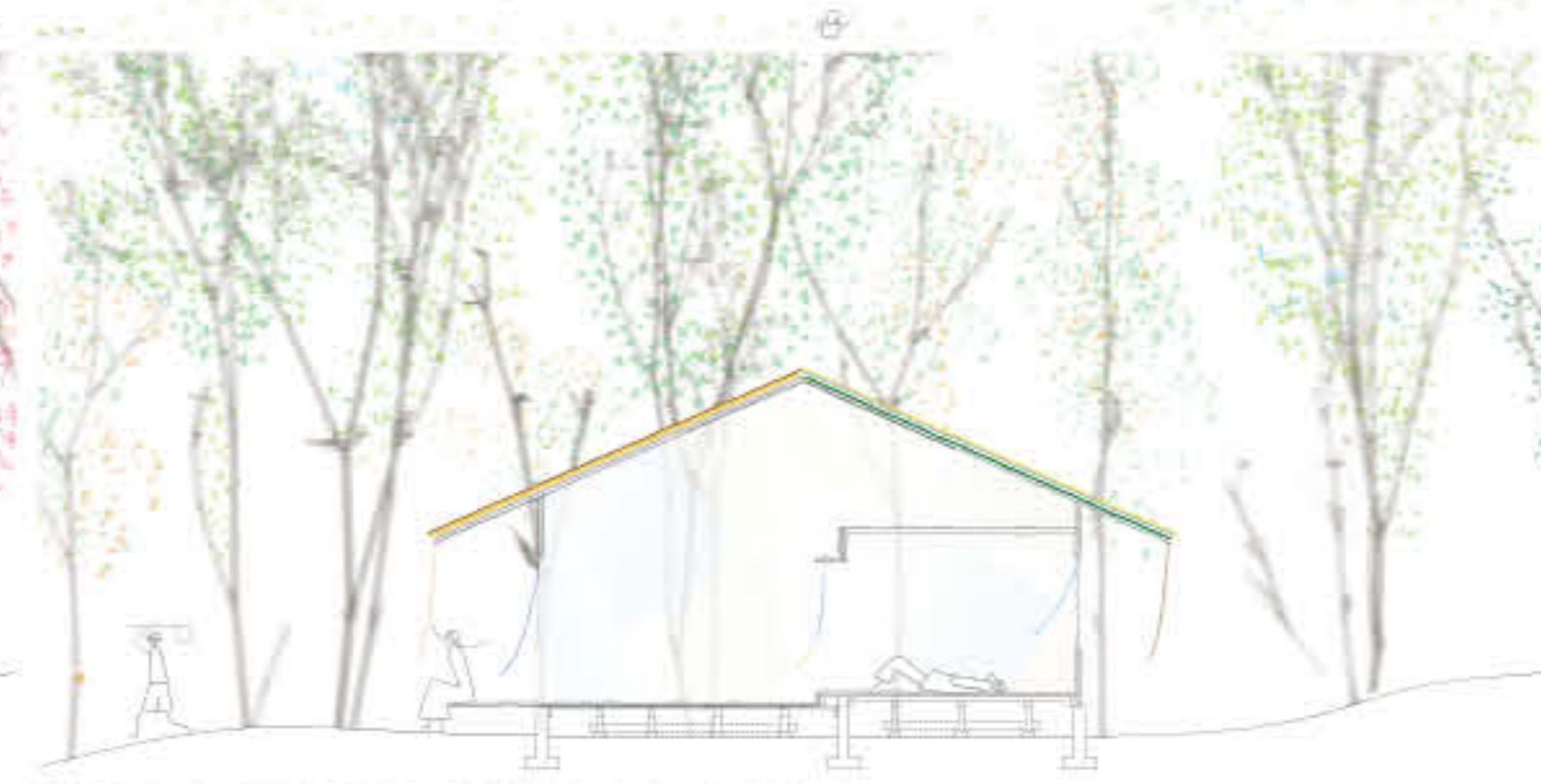
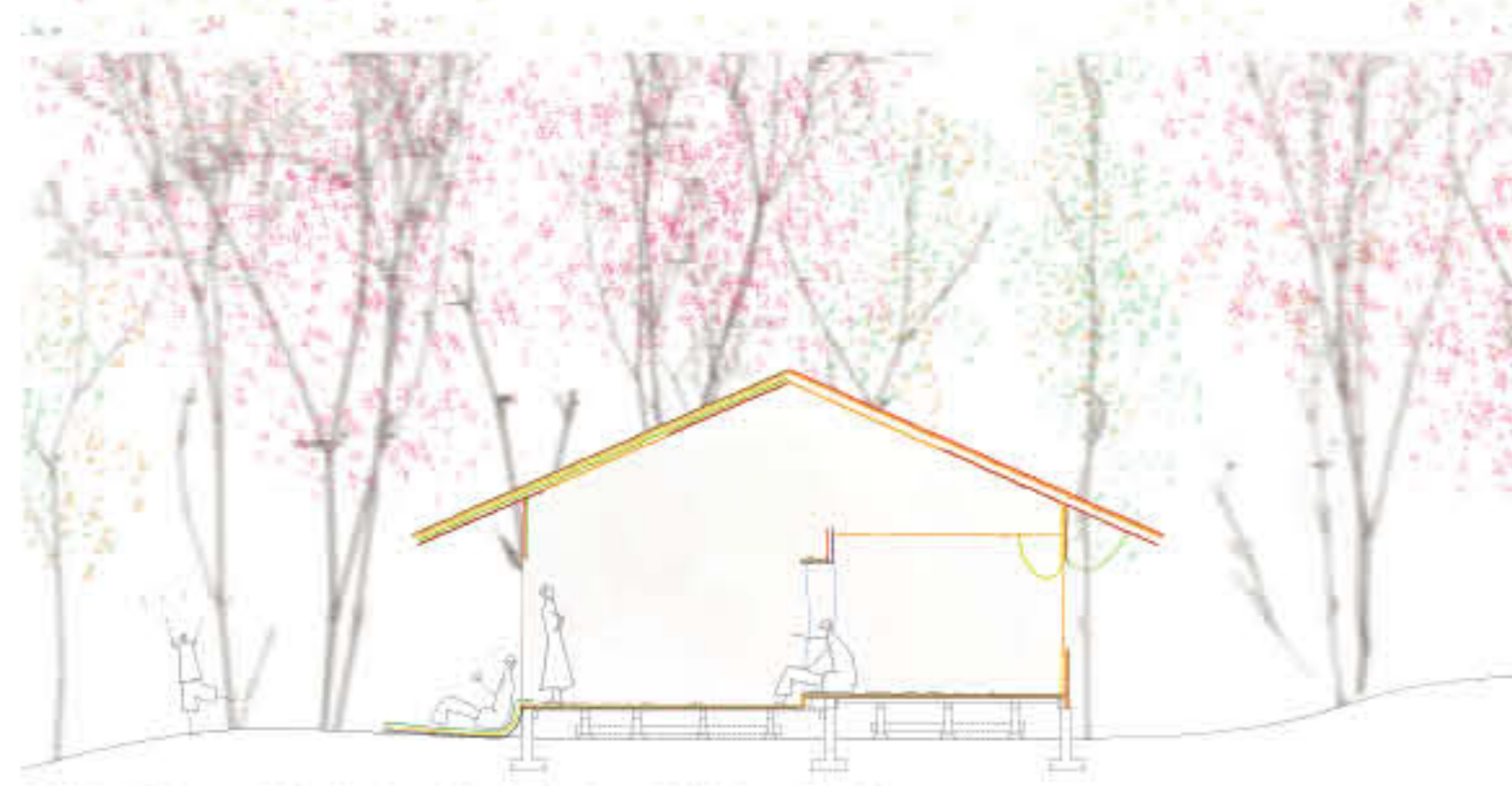
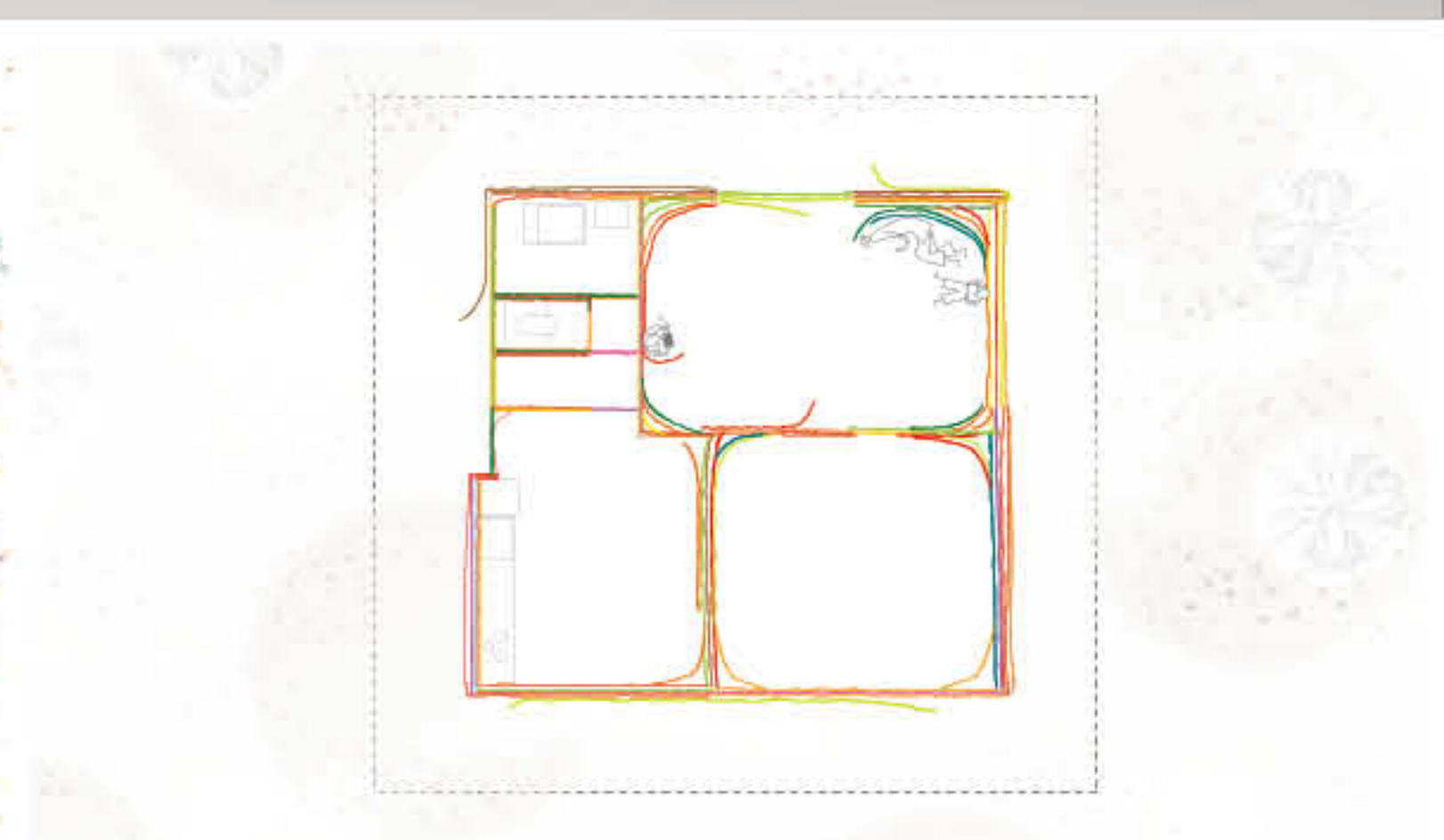
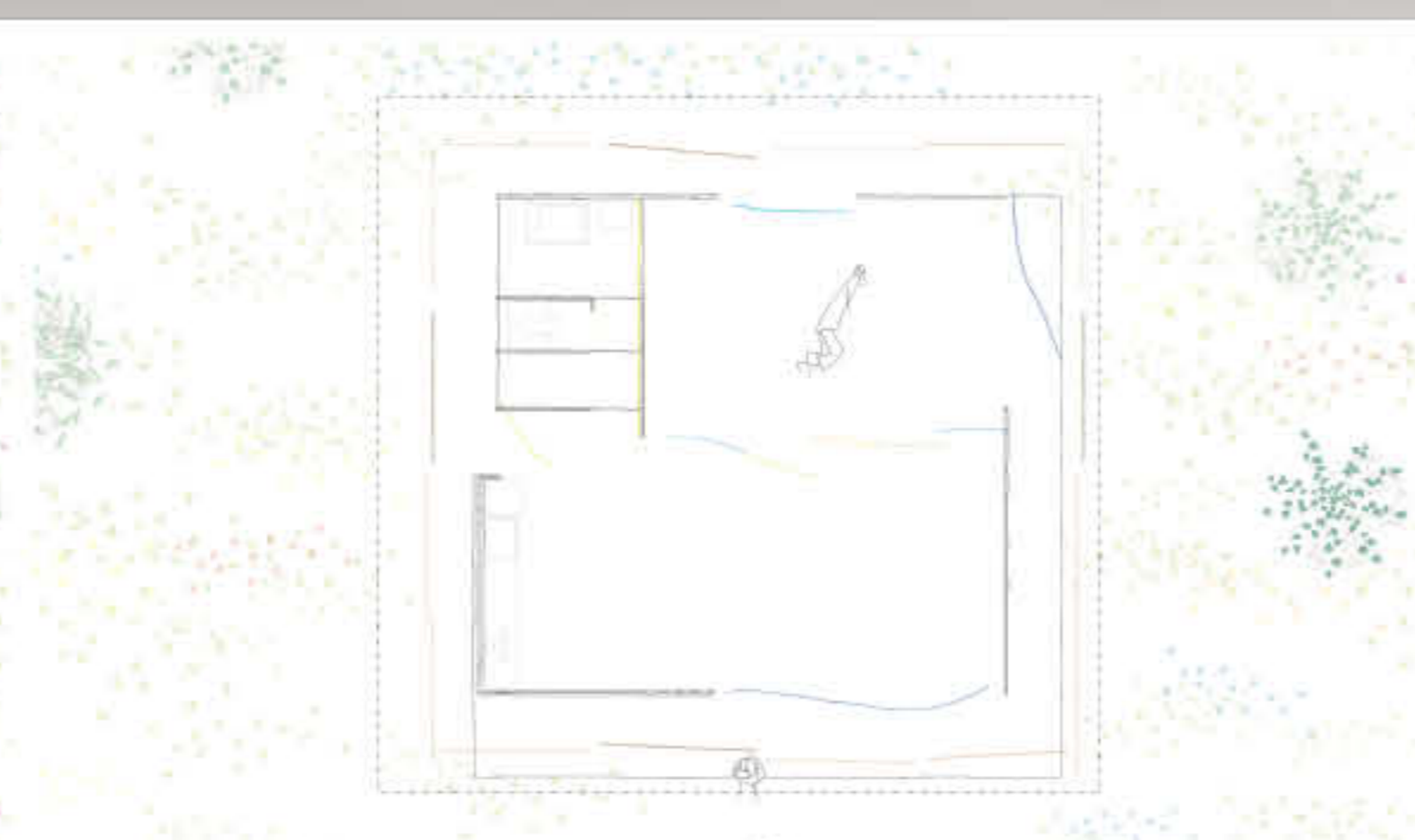
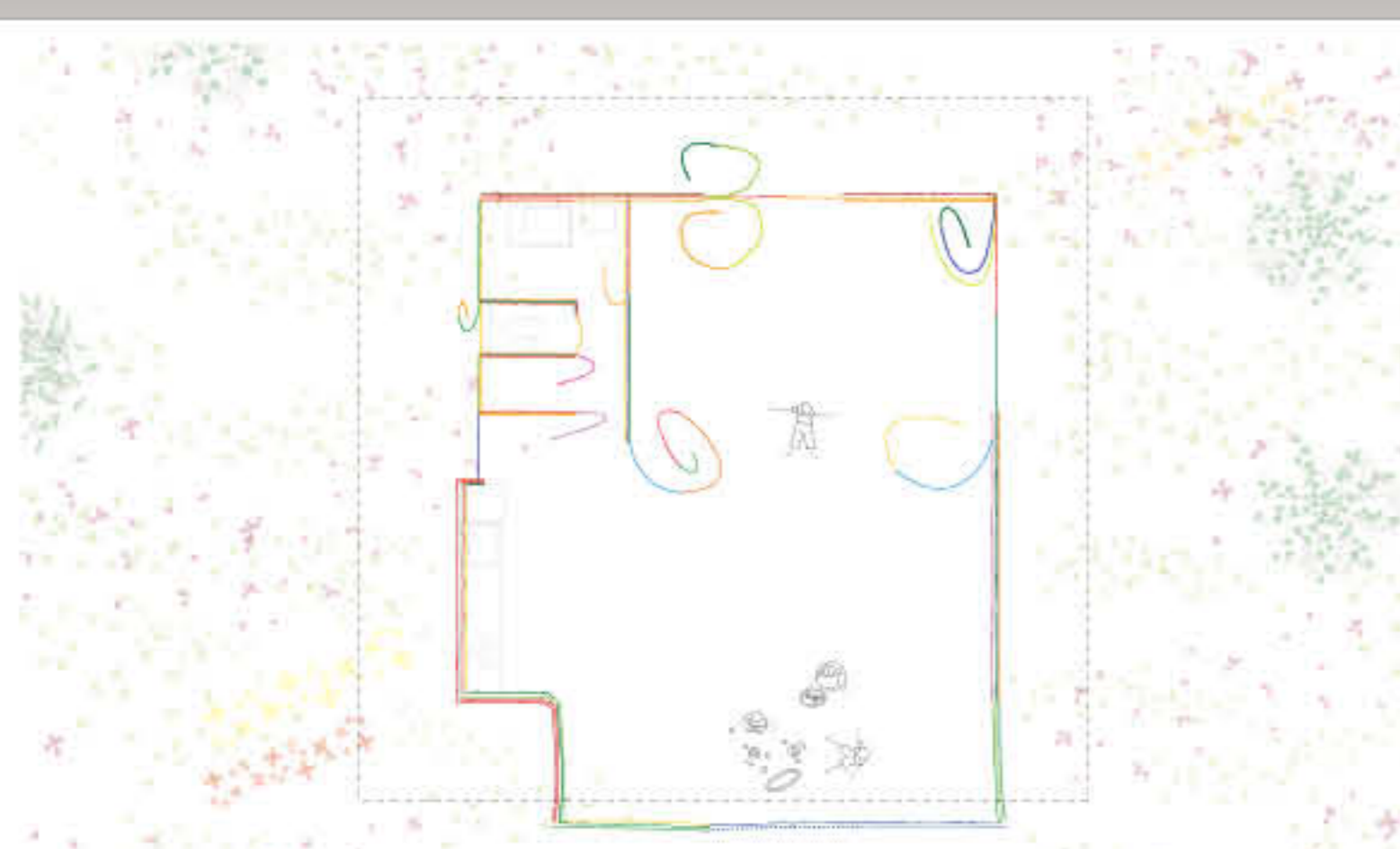


本提案は、人と家を重ねることで新たな関係を構築する。人に家という対象を重ねるには、両者を触れさせなければならない。「触れる」ことで、人と家の境界は消失する。それは、人が服を着る感覚と似ている。私たちが、着ている服を一つの輪として認識しない。服と人が「触れ合う」ことで、一つの輪と認識する。

「触れ合う」関係において、人にとって家は服となる。服となった家は、その周囲の状況や自身の気分によって変化する。それは階段。私たちが着て履を脱いだり、着て一枚羽織ったり、また、やる気を出すときに履を脱いだりする行為と同様である。「触れ合う」状態では、人と家は一つとなり、人の気分や周囲の状況によって家は変わり、新しい可能性を生み続ける。



本提案は、人の気分や周囲の状況によって様々な変化を生む。それは服を開くように開口を開け、重ねるように床・壁・天井が厚くなる。このように住み手と状況によって家は変わり続ける。



春さが和らぎ暖かい空を感える。壁に開口を大きく開けることで、外と繋がりを提供できる。

湿度な暖かさから、涼し暑い空を感える。風を通す存在を用いることで、涼しさを感じる。

残暑が過ぎ、涼しくなり秋を感える。大きな開口は閉じ、真分によって小さな開口が開く。

心地よい気候さから、涼しい冬の寒さを感える。壁の厚さを増すことで、寒さを抑える。